

令和 4 年 6 月 3 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2018～2021

課題番号：18H00650

研究課題名（和文）漢魏六朝期楽府詩の総合的研究

研究課題名（英文）A General Study of Yue-fu Poetry in Han, Wei and Six Dynasties

研究代表者

釜谷 武志（KAMATANI, Takeshi）

神戸大学・人文学研究科・名誉教授

研究者番号：30152838

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 7,700,000円

研究成果の概要（和文）： 雅楽は国家の祭祀・儀式において演奏され、その重要性は比類なきものであった。また歌詞は当代きっての文人の制作にかかるものである。しかしながら歌詞の難解さといわゆる文学性の低さのせいか、重要性は認識されていながらも、これまで取りあげられることが少なかった。本研究では『宋書』楽志二の定本の確定と訳注の作成によって、その詳細を明らかにすることができた。また「郊祀歌」「安世房中歌」が、すでに儒学の経典に近い位置づけをされていたこと、同時代の歌詞も柔軟に活用しながら、新たな歌詞を制作する過程を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

雅楽の歌詞は難解なために、中国古代史、制度史、思想史の研究者に敬遠されることが多かったが、本研究成果の公表によって、こうした方面の研究の進展に資することができる。中国古典文学研究においても、いわゆる文学作品の範疇を拡大して考察することができよう。日本古典にもこうした雅楽とその歌詞は大きな影響を及ぼしていることから考えて、日本文学や歴史の研究者のみならず、広く関心をもっている社会一般の人びとにも、信頼できる確かな材料を提供することで貢献することができる。

研究成果の概要（英文）： Ancient court music was performed in national rituals and ceremonies, and its importance was unparalleled. In addition, the lyrics were written by some of the most literate men of the day. However, due to the difficulty of the lyrics and the lack of literary quality, the importance has been recognized but it was rarely taken up until now. In this study, we were able to clarify the details of the poem through the finalizing the standard book and the preparation of translation and notes in Song-shu Yuezhi Chapter 2. We also clarified the process of creating new lyrics while flexibly utilizing the lyrics of the same period, as well as the fact that “Jiao-si Songs” and “Anshi-fangzhong Songs” were already positioned close to the Confucian scriptures.

研究分野：中国古典文学

キーワード：楽府 音楽 雅楽

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究代表者は、平成14～16年度に研究代表者として「六朝の楽府と楽府詩」(基盤研究(B)(2)、課題番号:14310203)の研究を遂行し、研究成果の一部として『宋書』楽志一の信頼できる定本、現代日本語訳そして詳細な注釈を完成して公表した。『宋書』楽志一は、先秦から南朝宋にいたるまでの音楽制度の沿革を記述しており、最も基本的かつ重要な文献であって、当該分野の研究者に大いに活用されて、論文等においても引用された。しかし、楽府詩の作品そのものは『宋書』楽志一ではなく、楽志二～四に収録されていて、中国文学で本来の研究対象たる文学作品としての楽府詩の研究には、着手できなかった。また楽志一の記述が楽志二～四、とりわけ楽志二所収の詩と強く関連していることは、この共同研究において痛感するところであった。

(2) ただ、『宋書』楽志二～四に収録される詩、なかでも二と四に録される詩の多くは、古来難解をもって知られるもので、句読を切るのも容易でない詩も含まれる。かかる作品について、一人の研究者が単独で格闘するのは現実的ではなく、複数の研究者が討議しながら妥当な解釈を導き出すのが最も効果的であると考えた。

(3) また、研究代表者及び分担者が、漢魏六朝期の楽府における重要な諸問題について個々に考察しながら、それをふまえて全員で検討する必要性も感じていた。具体的には例えば以下のとおりである。漢魏六朝期において、前代の楽府詩をどのようにとらえていたか、そしてそれらに基づきながらとくに祭祀や儀式的詩がどのように創作されたのか。後漢から三国にかけて、楽府詩一般がどのように制作され、どのような場において享受されたのか。著名な詩人が擬古楽府詩や、楽府詩ではない通常の詩の制作とどのようにかかわっていたのか。

2. 研究の目的

(1) 『宋書』楽志二に収録する漢魏六朝期の難解な楽府詩について、当該分野を専門としてきた複数の研究者が共同で解釈を施し、信頼に値する定本、詳細な注釈、達意の訳文の作成にあたる。逐次その成果を学術雑誌に発表し、機関リポジトリを通して公表していく。

(2) 上の作業を中心としながら、多角的な視点から漢魏六朝期の楽府詩の諸問題を総合的に解明する。具体的には、当時整備されつつあった宮廷音楽制度と結びつけながら、文人によって楽府詩がどのように創作され、どのような場において享受されたのかを、祭祀や儀式的場に注目して明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 『宋書』楽志二には、天神・地神の祭祀に用いられる郊祀歌と王室の祖先神の祭祀に用いられる宗廟歌、そして元会儀礼などで用いられる国家的儀式歌の、いわゆる雅楽の歌詞を収める。それらを対象に、百衲本『宋書』を底本としつつ中華書局の新旧点校本などを参考にしながら、担当者全員で本文の校定を行い、詳細な注釈、専門を異にする者にも容易に理解できる訳文を作成する。

(2) 宮廷音楽制度の変遷過程をたどりながら、前代の楽府詩の継承と模擬創作のありかたを解明する。たとえば『楽府詩集』で雅楽の典型として収録される「郊祀歌」「安世房中歌」という前漢の楽府詩が、魏晉においては言及されることはまれであるが、ならばどのようにして新たに創作されたのかを解明する。

(3) 著名な詩人が朝廷祭祀や儀式的歌詞制作に携わっているが、このことと擬古楽府詩の制作、楽府詩ではない通常の詩、すなわち徒詩の制作とどのようにかかわっていたのかを明らかにする。

4. 研究成果

(1) 『宋書』楽志二所収の楽府詩すべてについて、本文の校定を行い、詳細な注釈、達意の訳文を作成した。『宋書』楽志二訳注稿(一)～(五)として分載するが、(一)～(三)はすでに発表済みであり、(四)(五)は2022年、2023年にそれぞれ公表する予定である。百衲本『宋書』を底本として、中華書局の新・旧の点校本、蘇晋仁・蕭煉子『宋書楽志校注』、丘瓊蓀『歴代楽志律志校釈 第二分冊』などを参考にしながら、校定作業を行った。中華書局から新たに出版された点校本『宋書』は、旧版に比して文字の異同をかなり詳細に記している。しかし、それでもなお意を以て改めたと思われる個所がある。

一例を挙げると、南朝宋の王韶之「食挙歌十章」(旧点校本596頁、以下同)中に「歌盛美、告成功」の句が見える。底本では「告」は「造」になっているが、旧点校本の校勘記で「告」は各本、『楽府詩集』ともに「造」であるが、『南齊書』楽志によって改めたという。新点校本の校

勅記でも『南齊書』樂志によって「告」に改めたとする。皇帝の功績を天帝に報告するという内容は、たしかに樂府詩によく見られる表現である。もし本来「告」であるならば、ここで『宋書』が「造」にすることがあろうか。通常見られる表現をあまり見ることのない「造」にすることはまず考えられない。ましてや『樂府詩集』までが「造」であるというのは、『樂府詩集』編纂時点の北宋において、伝わっていた『宋書』では「造」であったことを示しているのではないか。分かりやすい「告成功」をわざわざ「造成功」に改める、もしくは誤まることは考えにくい。さらに『南齊書』樂志に拠ったというのが、『南齊書』所収の当該詩は、南齊の王朝でうたわれた時の歌詞と明記して載録しているのであるから、その前の南朝宋に制作された歌を踏襲しながら、一部分改変を加えた可能性が大である。『南齊書』で南朝宋の王韶之の作としていないにもかかわらず、ほぼ同じ表現であるからといって、より分かりやすい表現に改めるのは、校勘作業が十分でないと言われてもしかたないのではないか。本研究ではこのように、定本の作成にも細かい検討を加えた。

(2) 「郊祀歌」「安世房中歌」という前漢の樂府詩は、雅樂の典型とされるが、魏晉においては言及されることがまれである。この点からすると魏晉時期にあっては閑却されていて、その後の音楽制度整備の段階で、地位が高くなったように見える。しかしながら、晋代に制作された郊祀歌や宗廟歌を詳細に検討すると、数多くの表現が前漢の「郊祀歌」「安世房中歌」をそのまま用いたり、あるいは表現を変えて使ったりしていることが明らかになった。しかも宗廟歌においては『詩經』周頌などと並んでこれら前漢の歌詞がふまえられている。してみると、歌の名こそそのまま見えなくても、『詩經』に近いかたちで經典化されていて、魏晉以降の詩人たちは雅樂歌詞の制作にあたっては、これらを強く意識しながら作ったことが明らかになったといえる。

(3) 西晋の著名な文人である傅玄・荀勗・張華・成公綏は、いずれも四箱樂歌を制作しており今に伝わっている。内容と構成から考えると、傅玄と荀勗が近い。また張華と成公綏の関係については、張華の「食挙東西箱樂詩十一章」(588～589頁)と「雅樂正旦大会行礼詩四章」(589～590頁)を合わせて、その内容と構成を踏まえつつ制作されたものが、成公綏の「雅樂正旦大会行礼詩十五章」(591～593頁)であると考えられる。『宋書』樂志一でも、泰始五年に傅玄・張華・荀勗が「正旦行礼及王公上寿酒食挙樂哥詩」を制作し、別に詔があって成公綏も制作したとあるが、それと対応して歌辞内容の比較からも、成公綏の制作は他の3名とは別であったと想定できる。

(4) 荀勗は「正旦大会行礼歌」(583頁)が先に配列されていて、『晋書』樂志の記事に対応しており、おそらくこの「正旦大会行礼歌」は『宋書』樂志一にいう「魏雅樂四曲」の内容を改変したものであろう。一方、張華と成公綏の「正旦大会行礼詩」も魏雅樂四曲をふまえつつ、その内容は変えず、晋の三祖と武帝のことを詠んだものと考えられる。傅玄についてはいくつか問題があって、「正旦大会行礼歌」の配列順と歌辞内容や四言を基調とする点では荀勗に近いものの、傅玄のみが一章四句の形式を用い、またその歌辞が「篇」ではなく、「首」とされていることなど、他の3人とは異なる特徴がある。あるいは傅玄のみが、別格又は別の時期に作成した可能性もあるが、今後、継続して考察する必要がある。

(5) 荀勗と張華の「晋四箱樂歌」の歌辞を検討した結果、荀勗と張華はいずれも傅玄の郊祀歌や宗廟歌及び四箱樂歌と同じ語句や表現を用いており、特に張華は傅玄の歌辞を多く踏まえる傾向があることが明らかになった。『宋書』樂志二に収録されている「晋四箱樂歌」の歌辞編成は、『宋書』樂志一及び『晋書』樂志の記述と一致していること、またそこから傅玄・荀勗・張華・成公綏の「晋四箱樂歌」の関係性と制作の過程がうかがえること、さらに荀勗・張華・成公綏の3者の「晋四箱樂歌」の歌辞は傅玄の郊廟歌や四箱樂歌の歌辞を踏まえる傾向があり、特に張華はその傾向が強いことが指摘できる。

(6) 西晋時期の雅樂の歌詞に、直前の王朝である魏の公文書や曹植の作品をふまえた例がよく見られることから、制作時にかかる詩文を典拠を求めていたことが考えられる。たとえば、荀勗「食挙樂東西箱歌十二篇」(584～587頁)其四にいう「民無瑕慝」は、後漢の獻帝が曹操を魏公に任命する策命(『三国志』魏書・武帝紀)の「君有定天下之功、重之以明德……吏無苛政、民無懷慝」をふまえ、同「食挙樂東西箱歌十二篇」其五にいう「夷險平乱」「御衡不迷」は、曹操の令(『三国志』魏書・武帝紀の裴松之注に引く『魏書])、獻帝の曹丕への禪讓を示す詔(『三国志』魏書・文帝紀の裴松之注に引く『獻帝伝])にそのまま見えている。

また、成公綏「晋四箱歌十六篇・雅樂正旦大会行礼詩十五章」其四にいう「嘉禾生、穗盈箱」、同・其九にいう「冠日月、佩五星、揚虹蜺、建擘旌、披慶雲、蔭繁榮」は、それぞれ曹植「魏徳論謳」(『藝文類聚』巻85)にいう「猗猗嘉禾、惟穀之精。其洪盈箱、協穗殊莖」、曹植「与陳琳書」(『太平御覽』巻684)にいう「夫披翠雲以為衣、戴北斗以為冠、帶虹蜺以為紳、連日月以為佩」に倣ったと考えられる。

(7) 西晋時期の雅樂の歌詞に、同時代の庾貞「晋武帝華林園集詩」(『文選』巻20)の表現が複

数見られる。たとえば、荀勗「晋四箱歌十七篇・正旦大会行礼歌四篇」其三の「思我皇度」、成公綏「晋四箱歌十六篇・雅楽正旦大会行礼詩十五章」其九の「播仁風、流惠康」は、それぞれ応貞詩の「恢恢皇度、穆穆聖容」、「玄沢滂流、仁風潜扇」をふまえていると考えられる。応貞「晋武帝華林園集詩」は、泰始四年(268)、武帝司馬炎の主催する華林園での宴に参列した際に作られた(『文選』李善注引干宝『晋紀』、孫盛『晋陽秋』)ものである。荀勗や成公綏がこの宴に居合わせていたかも知れず、そうした場で披露される詩表現がかたちを変えて、雅楽の歌詞に取り込まれた可能性も排除できない。

(8) 曹植には樂府詩「野田黄雀行」に見える「利劍」など、劍に言及する作品があるが、曹植には刀劍を友情や信義を示すものとして描く常套表現だけでなく、「利」である特性に注目して表現する傾向がある。その特徴を、刀劍の銘や賦、刀劍に触れる詩歌を採りあげて検証するとともに、こうした劍の表現を用いるようになる背景としては、制作時期から見て曹丕との後継争いが関わっているであろうこと、さらには同じ時期に文学批評用語において、「武」の象徴でもある劍によって「文」の才をいう表現が、曹植の周辺で見られるようになることが指摘できる。曹植の関心や心情を反映して制作されたものであることを明らかにした。

(9) いわゆる三国志の時代、後漢末に曹操を支えた荀彧について、明清以降の白話小説中に「荀令留香」という表現が見えるようになるが、こうした表現は唐詩において熟していったことが二十に近い用例から見て取れる。時代を遡って「荀令留香」の用例を検討すると、六朝後期の樂府作品である張正見「艷歌行」中にも「荀令香」と見え、「胡姬酒」と対比されている。味覚と嗅覚が渾然となる相乗的効果が感得されるこの表現が、漢・辛延年の樂府詩「羽林郎」以降、樂府作品のなかで歌い継がれる「胡姬」の「酒」との対比においてなされていることは、同一表現が繰り返し用いられる樂府作品の特性から考えて、「荀令香」に一定以上の認知があったことが確かめられる。同じく六朝期の梁・劉孝威「賦得香出衣詩」に漢武帝の「栢梁台」と併称されていたのとはやや異なるかたちで、しかし、本質的な意味においては同様に、「荀令香」が人口に膾炙するものであったことを明らかにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計20件（うち査読付論文 9件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 佐藤 大志, 佐竹 保子, 釜谷 武志, 柳川 順子, 林 香奈	4. 巻 39
2. 論文標題 『宋書』楽志二訳注稿(三)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 未名	6. 最初と最後の頁 91-176
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 釜谷 武志	4. 巻 5
2. 論文標題 漢魏晋の文学に見られる華と夷	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 岩波講座 世界歴史	6. 最初と最後の頁 207-225
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 佐竹 保子	4. 巻 125
2. 論文標題 謝チョウ「游東田」詩の新しさ 特に後三聯の修辞に注目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 集刊東洋学	6. 最初と最後の頁 41-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 柳川 順子	4. 巻 1
2. 論文標題 曹植における「惟漢行」制作の動機	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 県立広島大学地域創生学部紀要	6. 最初と最後の頁 145-157
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林 香奈	4. 巻 73
2. 論文標題 剣の表現をめぐって 曹植を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 京都府立大学学術報告 人文	6. 最初と最後の頁 87-99
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤 大志, 佐竹 保子, 釜谷 武志, 柳川 順子, 林 香奈, 狩野 雄	4. 巻 38
2. 論文標題 『宋書』楽志二訳注稿(二) http://www.lib.kobe-u.ac.jp/infolib/meta_pub/detail	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 未名(中文研究会)	6. 最初と最後の頁 57 - 158
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐竹 保子	4. 巻 38
2. 論文標題 謝靈運「江中の孤嶼に登る」の「江南」「江北」 その詩語としての意味	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 語言教育研究論叢(大東文化大学語学教育研究所)	6. 最初と最後の頁 1 - 14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐竹 保子	4. 巻 22
2. 論文標題 謝チヨウ「遊東田」末聯にかかわる二、三の問題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 六朝學術學會報	6. 最初と最後の頁 43 - 60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柳川 順子	4. 巻 21
2. 論文標題 曹植《七哀詩》与晋楽所奏《怨詩行》 獻給曹植的鎮魂歌	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 楽府学	6. 最初と最後の頁 265 - 275
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 釜谷 武志	4. 巻 71
2. 論文標題 独創と模倣 漢魏六朝の文学論を中心に http://nippon-chugoku-gakkai.org/wp-content/uploads/2020/10/71-01.pdf	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本中国学会報	6. 最初と最後の頁 3-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐竹 保子	4. 巻 121
2. 論文標題 「恒に俄頃の用に充つ、豈に古今の為めに然らんや」 信仰告白としての「華子崗に入る 是れ麻源の第三谷なり」詩	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 集刊東洋学	6. 最初と最後の頁 1-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐竹 保子	4. 巻 9
2. 論文標題 「乱流趨正絶」と「乱流趨孤嶼」 読謝靈運 登江中孤嶼 一詩	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 文学与宗教研究叢刊 今古一相接 中国文学的記憶与競技	6. 最初と最後の頁 387-415
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 柳川 順子	4. 巻 -
2. 論文標題 晋楽所奏「怨詩行」考 曹植に捧げられた鎮魂歌	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 狩野直禎先生追悼三国志論集（汲古書院）	6. 最初と最後の頁 135-157
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤 大志	4. 巻 13
2. 論文標題 「国破」の記憶 杜甫「春望」の「国破」をめぐる	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本文学研究ジャーナル	6. 最初と最後の頁 84-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤 大志, 釜谷 武志, 佐竹 保子, 柳川 順子, 林 香奈, 狩野 雄	4. 巻 37
2. 論文標題 『宋書』楽志二訳注稿（一） http://www.lib.kobe-u.ac.jp/infolib/meta_pub/detail	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 未名	6. 最初と最後の頁 75-159
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐竹 保子	4. 巻 120
2. 論文標題 謝靈運「華子崗に入る 是れ麻源の第三谷なり」詩末聯と胡克家と郭慶藩	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 集刊東洋学	6. 最初と最後の頁 40-57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 林 香奈	4. 巻 70
2. 論文標題 曹植の文学とその継承 潘岳との関わりを中心に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 京都府立大学学術報告人文	6. 最初と最後の頁 85-98
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩野 雄	4. 巻 13
2. 論文標題 時を超える匂い 孫呉の感覚世界について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 三国志研究	6. 最初と最後の頁 31-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 狩野 雄	4. 巻 23
2. 論文標題 芳る祖国 陸機「悲哉行」の芳香表現をめぐって	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東北大学中国語学文学論集	6. 最初と最後の頁 51-68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐藤 大志, 屋敷 信晴	4. 巻 46
2. 論文標題 「康僧淵張翼贈答詩訳注稿(二)」東晋の僧侶詩の訳注稿	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東洋古典學研究	6. 最初と最後の頁 103-127
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 佐竹 保子
2. 発表標題 日本人如何接受杜甫文学？
3. 学会等名 北京論壇2019文明的和諧与共同繁荣（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 柳川 順子
2. 発表標題 曹植《七哀詩》与晋樂所奏《怨詩行》 獻給曹植的鎮魂歌
3. 学会等名 楽府学会第4回年会・第7回楽府詩歌国際学術研討会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 柳川 順子
2. 発表標題 曹植の二篇の「薤露」歌辞について
3. 学会等名 六朝学術学会第40回例会（新型肺炎流行拡大のため中止）HPで既発表
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 佐藤 大志ほか
2. 発表標題 いま『文選』を読む 中国古典文学の規範とその距離
3. 学会等名 日本中国学会第70回大会シンポジウム
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 釜谷 武志	4. 発行年 2021年
2. 出版社 明治書院	5. 総ページ数 504
3. 書名 陶淵明	

1. 著者名 狩野 雄	4. 発行年 2021年
2. 出版社 知泉書館	5. 総ページ数 498
3. 書名 香りの詩学 三国西晋詩の芳香表現	

1. 著者名 川合 康三, 富永 一登, 釜谷 武志, 和田 英信, 浅見 洋二, 緑川 英樹	4. 発行年 2019年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 408
3. 書名 文選詩篇(五)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

曹植作品訳注稿 http://yanagawa2019.sakura.ne.jp/soushoku_product/ 漢魏晋楽府詩一覧 http://yanagawa2019.sakura.ne.jp/use_it/

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	佐竹 保子 (SATAKE Yasuko) (20170714)	大東文化大学・外国語学部・特任教授 (32636)	
研究分担者	林 香奈 (HAYASHI Kana) (30272933)	京都府立大学・文学部・教授 (24302)	
研究分担者	柳川 順子 (YANAGAWA Junko) (60210291)	県立広島大学・人間文化学部・教授 (25406)	
研究分担者	狩野 雄 (KANO Yu) (80333764)	武庫川女子大学・文学部・教授 (34517)	
研究分担者	佐藤 大志 (SATO Takeshi) (90309625)	広島大学・人間社会科学研究科(教)・教授 (15401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関